

その後出なかつたし、伝染病も本部要員からは出なかつた。

私の部隊は各中隊ごとに島に残っていたので、四カ月後に遅れて帰った人もおり、私の家へ同郷の人の家族が問い合わせて来たりした。二月十三日、クチン発、内地は物が無いからと言われたので靴下に外米を四、五合詰めて帰った。船は日本の大和丸という。私が戦中移動の時に乗ったことのある大きな船であつた。

三月九日、大竹着、十日自宅へ帰る。山陽線で広島の原因による焼け跡を見、姫路の街は丸焼けでお城だけは焼けずにあつた。近所の人が焚火をしてくれ暖をとることが出来た。家族は皆元気でいたが、何の知らせもなく突然帰つたので皆驚いた。途中、自転車に乗つた村長と会い「和田君帰つたか」と言われた。その後は農業で、結婚は二十四年にした。私は戦地でも、幸運の連続があつて生還出来たのである。

昭和五十三年頃、フィリピンのマニラへ行った。当時の宿舎だった小学校へは行かなかつたが、町並みは

大して変わっていないなかつた。前にも申した通り通信隊は戦友があまりいない。岡山に二人、相生一人ぐらいしかいない。フィピンでの戦没者は地域的に言つても一番多く、軍官民合わせて五十一万八千人というところである。また末期のボルネオでも二万人近い方が亡くなつている。幸運と不運の橋を渡り歩いて帰れたことに感謝している今日この頃である。

南方 第二十一海軍通信隊

福岡県 渡辺 宣明

昭和十五年、志願した予科練に入隊が決定して、昭和十七年に入隊した。私は大正十五年三月十日、福岡県京都郡遅川町に生まれた。本来の現役であれば大正十五年生まれは、ほとんどの人が軍隊に入っていない。大正十四年生まれの人が、前年生まれの大正十三年の人と一緒の年に（十九年と二十年徴集兵）入営し、十五年は志願兵以外は兵籍の無い者が多い。

当時、航空隊で適性検査があり、不合格だと思っていた。現在の宇宙飛行士と同じで、グルグル回されたり、身体検査も目鼻に至るまで、厳しく、細かく検査された。前後一週間ぐらいかかったように思う。とにかく、戦前の昭和十五年のことであったから。

私の生家は農業であり、父はまだ若かった。兄弟は女三人、男四人、私が長男であったが軍人として身を立てる気持ちがあった。昭和十五年というと支那事変中でもあったが、少年であった私にとってはそう緊迫した時代ともあまり感じていなかった。

昭和十七年九月一日、佐世保、杵の浦の第二海兵団に入団、教育は相当厳しかった。年上の徴兵の人（大正十年生まれが多い）と一緒に教育を受けた。相手は二十歳、私は十六歳だから体力的にも負ける。しかし、同じ条件で同じ教育を受けるのである。

訓練の内容はほとんどが戦闘訓練で、教育的なことは通信学校へ入ってからである。他はほとんど体操、カッター、広い演習場での訓練である。初めは四等水兵であったが改正されて三等となり、十一月三十日、

二等水兵になるのが一期検閲が終わった時で、これでやっと一人前の水兵としての出発である。

同年十一月三十一日に佐世保を掃海艇で出発。二十人ぐらいの同年兵と一緒に、翌十二月一日任地朝鮮鎮海着、鎮海鎮守府に入って通話業務の学科講習から始まった。「トツー」のモールス信号から、受信信も一分間に四十五字受けられて、卒業である。私は九州生まれであるから、新兵の時は寒い所で大変苦労した。鎮海は内地と違って寒い。甲板に水をこぼしたらそれが凍り、翌春まで解けないとのことで、全部削り取られた。外出中広い道路の反対側を通る上官に欠礼したら叩かれたこともあった。

また、海軍は、蓮托生、一人の過失で全艦が沈む、従って一人の過失も許されない。そのため連帯責任で叩かれ、譬はバットで叩かれるから紫色に変わってしまう。しかし、このようにして海軍は鍛え上げられるのである。

ところが、通信学校では技術が大切で、我々初年兵

といえども金の卵として可愛がられ、体罰はあまりなかった。しかし、それだけに技術の勉強には厳しかった。

昭和十八年三月一日、横須賀の通信学校へ入学となる。その時には既に関門海峡のトンネルは開通していた。桜が咲いていて、久里浜ではベリーの上陸記念碑が建っていた。冬の鎮海とは違った暖かさであった。

我々は暗号教育の第六十四期生である。海軍の暗号書は水が付くと消えるようになっているといわれていた。厚さが三センチメートルぐらいあり、鉛がついていて沈むようになっていた。

通信については、佐世保、鎮海、横須賀で各三カ月間教育を受け、技術と学科、モールズで打信するのだから、重い物を持たせたり、はげしい運動はさせられない。私は英語の教育を受けていないので、アルファベットで受信するが、猫に小判で内容が判らない。當時も、英語教育が必要であったと思った。

ラングーンへ六月二日に出発した。海軍のみ「第六

図南丸」へ千人ぐらい乗って、シンガポールまで一月ぐらいかかった。敵の潜水艦が出るので駆逐艦が護衛して、台湾で補給し、シンガポールまで一週間、マレー半島は汽車でベナン、それからラングーンへ。私の仲間は二十人ぐらいだったが、第十二特別根拠地隊には兵員が二千人ぐらいいたと思う。

ドイツのUボートが入港した時、軍楽隊で迎えたのを覚えている。ラングーンではB 29が横一列に二〇〇機編隊を組んで空襲してきた。高度が高いので高射砲が届かない。左右の地平線から地平線まで並んでくるような編隊であった。

時間は朝食後だった。絨緞じゅうたん爆撃で特定の目標はなく爆弾を落とす。第一回の爆撃で仲間が四人即死した。高射砲隊もやられた。一日に第一次、第二次と、一時間か三〇分に一度来る。地上には生物がいらないようになってしまった。一トン爆弾のように大きなものもあったが、五〇キロが多かったようだ。

私達は五階建てビルにいたが、第一日で最上階、二日目は四階とか、五回の爆撃で、そのビルは跡形も無

くなくなってしまった。このビルは特別根拠地隊司令部であるから通信隊もそこにいた。そのため民間人も犠牲になったであろう。予測しない空襲だったから、邦人もビルにいたようだ。ラングーン爆撃で生き残った者はほとんどいなかった。

私も何回か空襲を受け、通信隊も移動しスラバヤへ向かうことになった。

私の船は七隻目だったが、船が入港するたびに空爆される。イラワジ河から上がった所に港があり、私達には幸運だったが、他の船はボカボカ沈められた。スラバヤへは昭和十九年十月、第二十一海軍通信隊へ着いた。スラバヤは平穩で通信隊はオランダ人の家であった。現地人が雇われていて、掃除・食事の用意などは私等通信隊員が直接することはなかった。

そんな生活も二カ月で、私は第二分遣隊勤務となり山の中に入ったのだが、恐らく本隊の予備として設置されたのであろう。全部で五十人くらいで、通信は五人ぐらいしかいない。そこでも暗号が主で、日本語に直していた。南方の海軍からの通信や、本部からの命

令、軍艦の発着場所、日時、目的まで判るのだから敵に暗号を解読されたら大変である。

巡洋艦「五十鈴」が沈没した時、ガダルカナル島から陸兵を乗せて、その晩にやられた。沈没場所には重油が層をなして三十六人しか助からなかったという。これも暗号が解読されていたのかも知れない。プーゲンビルで山本元帥機がP38戦闘機に襲撃された時も、暗号が解読された。インドネシアには島が二万何千あるというが、水路は決まっていたのでそこを狙われるわけだ。

その時、私は兵隊だから、来た通信文をそのまま上官へ上げるだけである。分遣隊は受発信の範囲が決まっただけで、決められた周波数のものだけ受ける。外国の傍受係はそれだけを取る。それにより発信場所が判る。電文内容は判らなくとも発信場所が判れば船の位置が判る。そのため、しょっちゅう周波数を変えるのである。

「本艦は本日より周波数を何々にする」と知らせる。また艦から発信をせず、キャッチャーポートに電

文を積んで、港の我々通信の所へ持つてくることもある。日本の暗号、防諜は後手後手になっていったということである。

第二分遣隊で一度だけ空襲があったが、非番で眠っていて記憶がなかったため、上官から皆への見せしめのため、ひどく叩かれたことがあり、一週間ぐらい体が動けぬほどであった。もし、本隊だったら進級停止というところであつたであらう。

昭和十九年九月、二等兵曹に任官し教育を受ける。命令を受ける方から命令を出す方になるわけである。体操の時でも、高い所から将校を含め全員に号令をかけるのだから緊張する。第二十一海軍通信隊本部に復帰したが、第二十一特別根拠地隊の中にあるので、スラバヤに帰って元の状態に戻った。生活でも通信隊は優遇されていたのかもしれない。後約一カ月間スラバヤにいたが、その間沈没艦船の海軍の兵隊が上陸して来た。その人たちは特根隊へ入り他の隊へ補充されるのである。

第二十一特根は平穩だったが、比島、マニラ、セレス等は大変な状態になってきた。

特根での勤務中に記憶に残っていることがある。現地人との関係だが、現地人の校長の子弟が兵舎に入つて来て、ゲリラと間違えられてか殺されたことが現地の新聞に載つたが、その後、校長との和解が成立してことなきを得た。また、和蘭人の子供が虎にさらわれたというので、我々が山狩りを頼まれ実施したが見付けることが出来なかった。

終戦後一カ月間は、第二十一通信隊にいた。昭和二十年の末、物資全部を連合軍に渡すこととなり、第二十一特根の軍需部の品を運ぶため、私が隊長で一週間、港まで運んだ。兵器類は私物の軍刀等を含め直径二メートルぐらいの大きい井戸の中へ投げ入れた。それは武装解除の命令が統一されていなかったためである。

その後、戦争犯罪の容疑者として刑務所へ入れられた。朝は粥一杯と副食は少して、一日二食であつた。

八畳ほどの広さの部屋二間に二十人が詰め込まれたのだから寝るのがやっとである。それに南京虫が多く悩まされた。一日一回しか外には出られない。マラリア、下痢で入院者も出たが、それらの人のうち何人かは死んだであろう。

抑留期間中はカタツムリ、蛇を捕り副食とした。粥は米だが腹がいっぱいにはならないからである。刑務所は高い塀で囲まれている本物の刑務所である。風呂にはたまに入ったが、あまり記憶はない。一週間に一度ぐらいだったのだろうか。収容された部屋の中は海軍だけで、将校も兵も皆同じであった。

我々は住民を虐待したこともない。むしろ友愛の精神で接し、現地人とも協力をし合っていたのだったが、何故か通信隊は全員が刑務所に入れられたのである。その間の不安は大きいもので、もし現地人が間違えて指摘すればそれまでであり、抗弁も出来ない。しかし、約一カ月後に船に乗せられ、今度はレンパン島へ入れられ、開墾し自給自足の生活をした。自分で食物を作り、家も建てて生活するのである。

第一次大戦後、ドイツの捕虜が収容され、多数の者が餓死したという、いわくつきの島である。日本人にはレンパン島を恋飯島、飯が恋しい島、食糧で苦勞した島として記憶に残る島である。戦勝国が敗戦国に対してとった見せしめの処遇であったのかもしれない。マレーやインドネシアの戦闘は日本軍が勝っていたのであるから。レンパン島では歌手の藤山一郎が同室であった。彼は連合軍の所へ慰問として連れて行かれた。

昭和二十一年レンパンを後に復員することができた。

死闘の鉄

兵庫県 光延 一徳

はじめに全戦域で戦没された二百四十万余柱の英霊に対し、御冥福をお祈り申し上げたい。なかんずく私の参戦したフィリピン戦線で、護国の鬼として国家の